

猿蟹合戦 ～猿は死んでいた～

野瀬 隆平

古くから語り継がれている日本の昔話に、桃太郎や、かちかち山と共に誰でも知っている「猿蟹合戦」がある。

この話を基に芥川龍之介が書いた『猿蟹合戦』を読書会で読んで、いくつかの新しい気づきがあった。

登場する人物（者？）として猿と蟹が主役として、また臼も大事な役を担って出てくるのは、芥川作品の前提にもなっており、これは自分が知っているのと同じである。ただ違うところもある。猿を痛めつける役が栗ではなく蜂に、また猿が逃げようとした時に滑って転ぶようにしかけるのが、卵になっている点である。

しかし話の筋として大きく違うのは、猿に青柿を投げつけられた蟹も、更にかたき討ちに合った猿も、死んでしまうことになっている点だ。龍之介が読んだときの話の結末は、このように両方とも死んでしまい、仇を討ったのは死んだ蟹の妻や子供たちとなっていたようだ。

ちなみに、滑って転ばせる役として、古くは牛の糞だったらしいが、昆布になっているバージョンもある。

人から人へと語り継がれる話は、その時の社会の風潮などを反映して微妙に変化してゆく。

今日では、蟹も猿も死なずに生き残り、改心した猿が蟹に詫びを入れ蟹もこれを受け入れて、両者ハッピーという平和的な筋書きに変えられていることが多いようだ。仇討は報復であり憎しみの心を生み出し、その連鎖が連綿と続くことになるからだ。

最近では、「合戦」という言葉も平和教育によろしくない、「かにむかし」や「さるとかに」などに題名が変えられている本もある。さて、皆さんが憶えている話の筋はどんなものだろうか。

ところで、芥川がこの著作で言いたかったのは、今は弱肉強食の世の中で、割を食うのは結局のところ弱者である。いや、他ならぬあなた方自身なのだという事のようなのだ。この作品が大正の終わりに書かれたことを考えると、当時のデモクラシー的な考え、あるいは、社会主義的な思想がその背景にあったと思われる。